

春也
目上
師
集

金井京之介

● 創拓社

や
し
香具師口上集

©Kyōnosuke Muromachi

Printed in Japan 1982

昭和57年11月30日 初版第1刷発行

著 者 室 町 京 之 介

発 行 者 株式会社 オンタイム出版
創 拓 社
代表 井 吹 晋

印 刷 所 凸版印刷株式会社
代表 鈴木 和 夫

発 行 所 株式会社 オンタイム出版
創 拓 社
〒 101 東京都千代田区三崎町1-3-12
(水道橋ビル4F)
電話 03-291-6841 (代表)
振替口座 東京7-58550

乱丁・落丁本はお取替えいたします。製本 凸版印刷

0081-011004-0811

香泉師白上集

香見師の七集とくじ

I 香具師・野士・的屋

あいつき

寅さん (トラさん)

帝釋さま (たいしゃくさま)

女寅さん (おんなトラさん)

香具師 (やし)

高市 (たかまち)

三種の仁義 (さんしゅのじんぎ)

瞽女 (こぜ)

的屋 (てきや)

神農様 (しんのうさま)

車蒸気 (くるまじょうき)

大道芸 (だいどうげい)

55

52

45

42

38

33

26

23

21

17

12

10



Ⅱ 香具師口上集

啖呵売 (たんかばい)	58
物売りの声	63
小岩の金魚と傘	75
新吉原細見 (しんよしわらのさいけん)	81
女角力 (おんなずもう)	82
からくり	84
《不如帰 (ホトトギス)》	86
《八百屋お七》	90
万年筆 (まんねんひつ)	96
人絹シャツ	99
易者 (ろくま)	108
《坂野の易者》	114



バナナの叩き売り	116
《坂野のバナナの叩き売り》	118
物産あめ売り	123
アイスクリン	125
瀬戸物売り（せとものうり）	126
ガマの油売り	130
ラムネ売り	136
外郎売り（ういろううり）	137
尻取り歌	143
ガギグゲゴ	145
七色唐がらし	150
オイチニの薬売り	153
薬草売り（ヤクソウウり坂野版）	157
チヨイチヨイ買いな	162



泣き売 (なきばい)	164
因果もの (いんがもの)	168
サーカス	170
百貨売 (ひゃっかばい)	174
活動大写真 (かつどうだいしゃしん)	187
演歌 (えんか)	193
演歌商法 (えんかしやうほう)	197
万能啖呵 (ばんのうたんか)	203
Ⅲ 符牒・隠語	
数の符牒	212
香具師の隠語	217
上梓まで (あとがき)	229



装 幀 中島 通善
插 画 今村 恒美
口上協力 坂野比呂志
写真提供 浅草の会
歌舞伎座
松 竹
坂野比呂志

I 香具師・野士・的屋

あいつき

口上とは、販売する商品の説明で、この説明を渡世上「啖呵」といい、「啖呵」なくして、香具師の商売は成り立たない。

聖徳太子の仏教伝来このかた——これこそ香具師の源でもあるのだが、千円札からも身をひいたことでもあるし後々ご登場いただくとして——で、この聖徳太子の時代から今日まで、日本文化の恰んどは、この「香具師」が、実に一手に、膝を叩いて、大地を踏んで「さア、どうだ判ったか」と、それこそ噛んで含めるように伝えたのだ。

そんな香具師の口上を集めておけば文化的にも意義があるし、娯楽の杖にもなれるから、微力ながらも、いや私の場合、媚力ながらも一番やっかと成ったるしだい。——大体格好をつけてる大百貨店の連中さえ、売り物は口上付きだもん、聖徳太子を頂天に載いた、千四百年に渉る「香具師」の歴史を辿れば鼻も高い、ザマア見ヤガれてえわけさ。

冒頭の小見出しに「あいつき」と書いたが、「あいつき」とは交際、交際は「つきあい」

で、香具師は往昔から、他人には判らなくても自分達だけで判ればいいと、単純に言葉を反対にした風習があるので、その通り「つきあい」を逆さにして「あいつき」としたままで、解釈すれば「あいつき」とは「仁義」の事で、現今の「名刺」と覚えればいいだろう。
——この後は逆さというからその積りでいてほしい。



親が他の子分に対する姿勢
手と足で履きかき履いたまゝを足と
手にあず

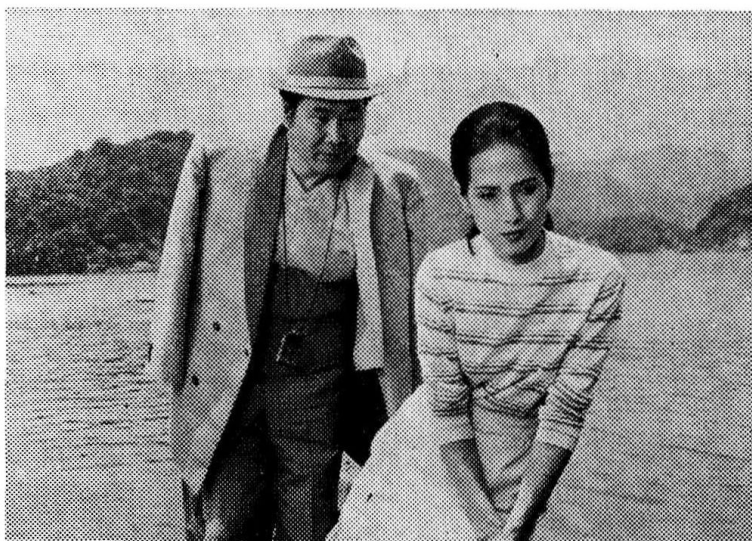


寅さん（トラさん）

さアてみなさん。かくは口上あいすみますれば、トントンボタンと叩かにやならない。叩きや出てくるテキ屋の歴史、そうだそいつの話なら、今や日本の人気者、この快男児に齒切れよく、話し始めの聞き納め、緒口いとぐちきってもらいましょう。

「私、生まれも育ちも葛飾柴又です。帝釋天で産湯うぶゆをつかい、姓は車、名は寅次郎、人呼んで瘋癲フイテンの寅と発します」

仁義もどきの自己紹介おめみえは、日本映画未曾有の大長編読切連続ついに今年の夏の「寅次郎アジサイの恋」で二十九本に及ぶ大ヒット松竹映画「男はつらいよ」の渥美清が、スクリーンのお目見得に、ファンの郷愁と、人間の弱点たる未知への歓心をそそるプロローグ、山田洋次監督作とところのセリフである。いわば、極めて楽に客に取入る方法でガスよ。



29作目「寅次郎アジサイの恋」(松竹)

だがお待ちなさいお立合い、どうせ仁義の
効果をねらうならばこのセリフ

「お控えなすって。手前生国と発します
関東は武蔵です。遙か上州の山から落ち
ます大利根の流れて早き江戸川の、下総
矢切野菊の墓への渡し船のあるところ、
帝釋天の鐘が鳴ります柴又で、義理と情
けのためならば、いつでも死にます男一
匹、姓は車、名は寅次郎、人綽名して瘋
癪の寅と発します。お見掛け通りの若輩
者にごさす。齋後万端よろしくお引
廻しの程願います」

——この程度流暢に、ほとんどの仁義みたいに表現すべきだろう。箇にして要を得ればそれでよいと、仁義の効果を狙ったのだろうが、寅さんのはチンピラ仁義でとこだ。

ところでこの映画は大きなミスを犯しているのである。編中の寅さんはテキ屋という設定だが、これが間違ひ、テキ屋に一匹狼はいない。親分から盃を貰って一家に入って群れの中で生きる。これがテキ屋の鉄則だ。なのにテキ屋ヅラして仁義のマネゴトでもしてご覧なさい——エイッとはかり一刀か、はたまたバーンと一発か、朱に染まって敢なくなっても苦情は絶対つけられない。いわば死に損撃たれ損、それがこの世界の不文律というものだからうっかり仁義も切れやせん。

おまけに寅さん、小さな旅行靴一個で旅に出る。何を売するのか、これは何でも構わないけど、肝心要の商品はどうするのか、行くさきさきには問屋があるはず。だから仕入れをしなきゃならない。仕入れをしたら売場所を御当地親分から貰わなきゃならねえ。無断で店は開けねえ。そんな旅なンざしても仕様が無え、仕様が無ければするわけアない。

「結構毛だらけ猫灰だらけ。見上げたもんだよ屋根屋のフンドシ。見下げて掘らせる